

和泉式部試論

—その人間像を中心として—

西 山 孝 子

目 次

序

本論 第一章 式部の恋愛歌

第二章 式部の自然詠歌

第三章 式部の挽歌

結び

序

和泉式部は平安時代の女流作家の中でも、特に自由奔放な恋愛歌人として有名である。かの女の多情な資性は、その恋愛遍歴を見ると明らかであるが、そうしたかの女の行動への道徳的評価はともかくとしても、その遍歴の中にあつてはじめて、式部の千五百余首の歌は結実したのである。青木生子氏は式部の歌に対して「恋に身ぐるみ生きた体験の厚みや深さからくる追真性」の存在を認め、それを「時代の中にあつて時代を越えるものである」と評され、また清

本文雄氏も「このような芸術の真の理解者は、はるかにくだつて近代を待たねばならなかつた」と評されているように、式部の歌には、趣味恋愛の繁榮した王朝期の時代的背景を越えて、人間の木質に迫ってくるものがあるのである。これが式部の和歌の文学性であることは紛れもないが、その追真性の原点は、かの女の歌に内包される「なげき」にあるように私は思う。では、歌集全体を通して窺えるかの女の「なげき」は、一体、どのようなところから生じたのであろうか。このことを念頭に置いて、和歌の中から私なりに和泉式部の人間像を追究してみたい。

そのための方法としては、具体性をもたせるために、一応便宜的に、式部の歌を恋愛歌、自然詠歌、挽歌と分けて見てゆくことを試みた。

なお、引用した和歌の下につけた括弧内の数字は「和泉式部歌集」(岩波文庫)の歌の番号である。

本 論

第一章 式部の恋愛歌

和泉式部の数多い恋愛の中でも、かの女の和歌の才能と官能とが

最高潮に發揮されたのは「和泉式部日記」として表わされた帥宮教道親王との恋愛であった。この恋の経過を見ることは、式部の恋愛に対する態度を知るのに重要である。

橘道貞を夫としながら、冷泉院の第三皇子彈正宮為尊親王との恋に落ち、それが宮の死によつてはかなく終わってしまった式部によつて、為尊親王の弟宮である帥宮教道親王のさそいかけは、式部の多情な資性に訴えかけるものが大きかったと思われる。

かゝる香によそふるよりはほととぎすきかばやおなじ声やしたると(二二七)

為尊親王の死後、喪に服していた式部のもとへ教道親王から届けられた橘の枝に対して自分からさそいかけるような歌を返した式部である。この頃の式部の日常は「夢よりもはかなき世の中をなげきわびつつあかしくら」^{注3}している状態であった、その折も折に届けられた橘の花に対してのこの歌に、すでに恋なくしてはいられない式部の多情な一面があらわれているといえよう。

帥宮との歌の贈答が度重なり、式部が次第に「つれづれもすこしなぐさむちしてすぐす」^{注4}ようになった頃のある一夜の契りを契機に、恋愛は次の段階に行つてゆくのである。

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬけふの夕暮れ(八七八)

恋にたゆたう式部の苦しい心中が明確に示された歌といえる。

宮の強い情熱に式部は終に身を委ね、宮の南院へと移り住むのであるが、この恋がかつてない程に燃えた理由の、一つに式部と宮との精神的連帯がある。それは次の一連の贈答に明らかである。

(宮) 時雨にも露にもあてでねたる夜をあやししくぬるる手枕の袖

(式) けさの間に今は消ぬらん夢ばかりぬるとみえつる手枕の袖(九〇一)

(宮) 夢ばかり涙にぬるとみつらめど似しぞわづらふ手枕の袖

(式) 道しばの露におきゐる人によりわが手枕の袖もかはかず(九〇二)

といったお互いの官能と歌才とが見事に共鳴したかけあい、また、

(式) ふれば夜のいとどうさのみしらるるにけふのながめに水ま

さらなん(六四五)

(宮) なにせんに身をさへすてんと思ふらんあめのしたには君のみやふる

のような、生きることの辛さを詠んだものなどは、お互いを自己の生まれ変わりに感じさせる精神面の連帯意識が窺える。

式部と宮との恋は、かの女の南院入りで一応の成就をみるのであるが、この南院入りの時点においてもかの女が「この宮づかへほいにもあらず、いはほのなかこそすまほしけれ」と言い、またさらに、「心うき身なればすぐせにまかせてあらなん」と言っていることは、注目すべきことである。こうした式部の愛慕はかの女の恋愛とどのようにかわわっているのだろうか。帥宮とのあり方を離れて、その歌の中からみてゆこうと思う。

式部は恋のさなかにありながらも、恋の喜びを歌う女性ではなかった。それは日記を見ても歌集を見ても明らかである。

くろかみの乱れも知らずうち伏せばまづかきやりし人ぞ恋しき(八六)

かく恋ひばたへず死ぬべしよそにみし人こそおのが命なりけれ(九一二)

鈍重な官能とあふれる心情とが一つのものとなって打ち出された
実感的な恋の歌である。恋の官能に浸り、求めてやまない式部の心
中が表われているが、ここには、愛欲に身を委ねつつ、その底には
式部の孤独と寂寥とがにじみでている。そしてまた、これらの歌の
迫真性は、かの女の奔放な体あたりの恋によってしぼり出されてく
る実感に支えられていることがわかるであろう。それは、

なげくことありとききて人のいかなることぞととひたるに
ともかくもいはばなべてになりぬべしねになきてこそみせまほ
しけれ (一六三)

の歌によって、一層明白になる。言葉さえも捨て、泣いて見せる式
部の涙は、おそらく恋の孤独と寂寥がせきを切つてあふれ出てくる
ものであったにちがいない。

式部の孤独は、それ故かえつて恋うる心を大きくする。燃焼を願
いつつかの女の心はあきらめ、あきらめながら燃えようとたゆたう
のである。

「こころうきをみるみるたのむはわがこころにもあらぬに
や」といふをとこに

我もわれ心もしらぬものなればいかがつひにはなるとこそみぬ
(六九五)

おもひかけずはかりてものいひたる人に
人とはばいかごとへんおほかたは君も忘れぬ我もなげかじ

(一一七六)

ここには、恋のはかなさを認識した式部の姿が示されてはいない
だろうか。このような恋のはかなさ、無常を自覚する歌は、これの
みにとどまらない。次の

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人あまくだりこんものならなくに
いくつづついくつかされて頼まましかりのこの世の人の心を
(八一)

の歌には、恋愛のはかなさを知りすぎるあまり、その一方で永遠の
心の平安を願う式部の心情が極めて客観的な自己省察の態度で示さ
れていると言えるのではなからうか。

ここで、私が想像することは、恋のはかなさと同時にかの女は、
自己の性格にも認識が徹底していたのではなからうかということだ
ある。次の歌から考察してゆきたい。

たちちめいさめしものをつれづれと眺むるをだにとふ人もな
し (二八七)

寝る人をおおすともなき埋み火を見つつはかなくあかす夜な夜
な (六九)

これらは自己のつれづれをもてあそぶ性癖を認めていると考えら
れよう。また

やむごとなき男に
白浪のよるには靡く靡き藻の靡かじとおもふ我ならなくに

(四四一)

の歌では、自己の肉体の自覚を告げていると言えよう。「な」と
「なび」を大胆に使いこなし女体の官能をこの上なく艶やかに詠
んでいる。

自己をこのようなものと自覚する式部は、「つれづれ」を嘆く一
方においては、その「つれづれ」故にかえて大胆に男をさそい、
自ら積極的に行動したと思われるのである。このことは、帥宮に返

した最初の歌でも思い出されることである。さらに次の

つらけれど忘れじとおもふ人に

うしとても人を忘るるものならばおのが心にあらぬと思はん

(六六八)

の歌になると、自覚というよりも自覚しすぎる余り、ほとんど自己放棄している式部なのである。

さて、式部にとって「つれづれ」の深淵にさらされることは恋愛の渦中における孤独や寂寥以上に耐えがたいことであつた。従つて恋に溺れることは式部にとってはひとつの自分を慰めるための遊戯として捉えられていたといえよう。「つれづれ」を慰めるための遊戯としての対象が恋であつたことは、式部の多情な資性の故であることはいうまでもなく、また、趣味恋愛の盛んだつた当時の時代性を反映していることも当然である。

しかし、式部を考へる場合、このことのみで判断するのは誤解であろう。多くの男性との交渉をもちながらも式部をして、とりわけ帥宮との恋愛生活を

あかざりしむかしのことをかきつくるすずりの水は涙なりけり

(九八六)

と、残そうとせしめたものは一体何であつたか。それは精神面における連帯を求めて彷徨する式部が、終にめぐり合つた帥宮への真実の愛惜の心であつたのであらう。

恋の無常を知る式部であることは、すでに認め得たのであるが、こうしたはかないものに情熱を注ぎ、歌の才能を喚起されること、が、「つれづれ」にひそむ式部の生の姿勢であつたと思うのである。こうした意味では、式部は永遠の恋の彷徨者であると言え

よう。

第二章 式部の自然詠歌

式部の自然観照の態度について「素材を表現して、それにあらわされた内容精神は『あはれ』に重点がおかれていて、その『あはれ』によつて示される美の憧憬は幽かなものに求められている。(中略)自然現象は常にそれ自体独立して存在することなく、人事の添景として描かれている。」という見解がすでにあるが、この章ではこのことは、ひとまず踏まえた上で、具体的に式部の人事と自然現象とのかかり合いを見てゆくことにする。第一章で述べたように、式部が永遠の恋の彷徨者である以上、この場合、人事とは恋であることをまず踏まえておかなければならない。従つて蔽密には自然詠とはいえない歌をも考察の対象にすることはやむを得ない。

まず、式部の自然詠を一読して明確に特徴づけられることは、天候に関すること、つまり風、雲、霧、露、嵐、空のようなものを多く詠んでいることである。それらの歌は、

二日、風のいたう吹くにみだるるくもを

いつまでかけぶりとならで風吹けばただよふ雲をよそに眺めん

(一一四九八)

くれつかた霧のたたずまひ、そらのけしきなどあはれしられんとて

いまはとてたつきりさへぞあはれなるありしあしたの空にた

れば (一一五〇八)

のように、死の予感をも感じさせるような自己の無常を詠んだもの、また、

七日、風のいとほけしきに

露おきし木々のこの葉をふくよりはよにも風の身をこそはなむ

(二五一八)

八日、おちつもりたるこのはを、風のさそふもうらやましく
て

目をへつつ我なに事をおもはまし風のまへなるこのはなりせば

(二五三九)

のように、風にさそわれる木の葉のごとく一定しない自己の心を認
めたと思われるもの、さらに、

九月ばかり、鳥の音にそそのかされて人のいでぬるに

人はゆき霧はまがきに立ちどまりさも中空に眺めつるかな

(一八二)

のごとく、どこにも焦点の定まらない「つれづれ」の思いを詠んだ
ものなど、暗い沈んだ感じのものが多い。これらの歌は、第一章で
見た、自己省察、自覚の歌と共通する静けさがある。恋多く一定し
ない自己の資性を認めている式部が自然の内に自己を投入し得るも
のは、やはり一定しない、自ら移ろい、はかなく消えてゆく露や霧
や雲などの天候であったのだろうか。

さて、私はここで、帥宮との場合における天候の歌に注意してみ
たいと思う。

さゆる夜のかずかくしぎは我なれやいくあさしもをおきてみつ

らん (四三三)

しもがれはわびしかりけり秋風の吹くには萩の昔づれもしき

(四一五)

秋のうちにはくちはてぬべしことわりのしぐれにたれか袖はから

まし (八九四)

日記中の宮への返歌である。寂寥とした秋の風情と、やはり同じ
ように孤独な式部の心情とが同じ地点で捉えられた秀歌である。第
一章で日記から引用した宮との贈答歌にも見られるような、こうし
た静かな、比較的客観的な自己省察の姿勢は、恋のはかなさも自己
の無常も知っている二人の精神的連帯が基盤となって、その心情を
やはり、はかなく移ろう天候という自然現象の中に結実させたとい
えよう。

しかし、以上述べてきたような自然現象と心情との一致がなされ
るのはかの女の恋心が高揚した時だけに限られる。それは次の歌が
明らかにする。

敦公しのびのこ糸もきこえぬにまだきもこゆるあやめ草かな

(七〇四)

「あやめ草」を自分にたとえて、訪れぬ帥宮を怨む歌である。寺
田透氏がこの歌の作られた時期を南院入り後と推定しておられるの
に従うならば、この歌は式部のどんな心の様子を意味するか、それ
は、式部の南院入りによって、一応の恋の成就がなされたことは、
今度は別離の不安の始まりであったと私は推測したい。そうした不
安のために、客観的に自然を受けとめられない式部の悩む姿が窺え
ると思うのである。

さらにまた、式部は「あやめ草」を自己になぞらえることで何を
象徴しようとしたのか。他の「あやめ草」の歌を見てゆこう。

五月五日ある人に

かくれ沼におふるあやめののこらぬに人のふるねぞかなしかり

ける (一一八五)

いかなる人にか

ひく人もなくてきのふは過ぐしてきわが忘るるにおふるあやめ

は (五七四)

三月三日

あやめ草さ月ならねどわが袖にひとしれぬねはいつかたえせん

(六一五)

これらの歌はいずれも官能的な恋の心を歌わぬものはない。寺田透氏が「あやめ草は抑制の意志にもかかわらず生い育ち力を増してくる満たされぬ欲情の象徴」であると述べておられることに、すべては端的に示される。すなわち「あやめ草」は式部の肉体の情念の強さを表現しているのである。多情な自己の資性を知る式部にとって「あやめ草」とは最も的を得た自己の表現素材であったのであろう。

第一章で式部が自己認識は徹底して冷静であることを述べたが、私はここで、かの女がそれでも幾度も恋に溺れようとする生き方は肉体に規定された情念の強さがあったからであろうと認めたい。

さらにまた、この章で明らかになったことは、自らがはかない恋の遊びに移ろいつつ、おそらく無意識ではあったらうけれども、天候という移ろいやすい自然現象に自己を対象化しようとする式部の美意識である。

それは恋という感情の高揚時にしか発現されず、しかもついに完全には対象化はなしていない。これもまた、式部の情念の強さを物語っているよう。

第三章 式部の挽歌

この章では、式部の挽歌を見てゆくことを通じて、当然そこから連想される式部における死のイメージ、さらに宗教的なものに対する態度にまで論をすすめたいと思う。

式部の最愛の恋人、教道親王の死後、かの女が詠む歌はそのいずれもが悲嘆憂愁の色濃いものである。

なき人のくる夜ときけど君もなしわがすむ里や魂なきの里

(九四三)

物をのみ思ひ寝覚めの床の上に我が手枕ぞ有りてかひなき

(一〇四三)

ここに見られるのは、袖宮の死を悼む式部の姿ではあるが、宮の死を悼みつつ、かの女が嘆いているのは、はかなく逝いた宮への思いやりではなく、孤独と寂寥を味わう式部自身の身の上であることに注目したいと思う。ここに、式部の強烈な生への執心と、死に対しての独特の感じ方が窺われるのではなからうか。次の歌、

わが心夏の野べにもあらなくにしげくも恋のなりまさるかな

(一〇〇一)

鳴けや鳴けわがもろ声に呼子鳥呼べばこたへて帰り来ばかり

(一〇〇五)

などに見えるはけしい恋心は喪中の歌とは思えない程に、切実で苦しげである。死という永遠の別れは、事実としてはあるけれども、決して式部の恋うる心を、自らの死へ、さらに宗教的自覚へと移行させるものではなかったことを示すのではなからうか。このことは次の歌に明らかであらう。

なほ尼にやなりなましと思ひたつにも

すてはてんとおもふさへこそ悲しけれ君になれにし我が身と思

へば (九五三)

おもひきやありて忘れぬおのが身をきみがかたみになさむ物と

は (九五四)

尼になろうとする気持はあるけれども、我が身に泌みついた宮との恋愛生活の刻印の方がどうしても自分から離れない式部の苦悩する姿がある。ここに、宗教に逃れることのできない式部の生への執心を窺い見るのであるが、その執心が、恋の苦しみ故であるところにかの女の恋の彷徨者としての真実を知る思いがするのである。

また、この二首に私は式部の独特の死の捉え方が表わされているように思う。二首の意は「我が身は帥宮の形見として残されているのである。精神的連帯によって燃えた二人の恋であった―その恋の証しは我が身にしかないのである―それならば、この身までがなくなることは、かえって悲しいことではないか」というような心情であり、物理的な死が、決して二人の決定的な別離を意味するものではない事を示している。帥宮は式部の心の中に生きているのである。この心が第一章で引用した、

あかざりしむかしのことをかきつくるすずりの水は涙なりけり

(九八六)

と表現され、「和泉式部日記」として結実したのであると思える。

愛するものの死に遭遇して、宗教的自覚を完全には知らない式部である。それは帥宮の死後にも、結局かの女が藤原保昌と結婚したことで裏付けられるかの女の生への執心があったからである。が、それだけではない。今述べたように、愛人の死というものが肉

体の別離のみであって、心までの別離ではないという式部独自の死の捉え方があったからでもあろう。

ともあれ、最愛の人の死が、宗教的自覚へ自らの死へと発展しないことは、式部にとっては、大きな苦しみであったにちがいない。

はかなしとまぎしく見つる夢の世をおどろかて寝る我は人かは (九六三)

と、宗教心に目覚めない自己を孤独と嘆きの中で責めるのである。そしてたゆたい求め得ず、結局身と心は自分にとって別個のものであることを知るのである。この体だけの別離という意識、それ故かの女の挽歌は、増々悲嘆の情を深めてゆくのではなからうか。

絶えし時ころにかなふものならば我が玉の緒により代へてま

し (九七八)

と、宮の命を自分の命と代えたいと願うけれども、それはすぐ甲斐なくてさすがに絶えぬ命かな心を玉の緒にしよらねば

(九五二)

いとへども消えぬ身ぞうきうらやまし風のまへなるよひのとも

しび (一〇三六)

と、そうすることのできない嘆きに変わってゆくのである。

さて、挽歌を通して式部を見てきたが、ここで私が認め得ることは、死という別離に際して、宗教に逃れることもできず、はげしい追慕の情をあくまでも切々と歌いあげる式部の姿である。恋愛において、式部の心が最も高揚し、詩的才能が喚起されるのは、おそらくその恋が、決して二度とは自分の手のうちに見ることのできない、去りゆく時であったのだからと私は思うのである。

結 び

伝説的なまでに有名な和泉式部の多情奔放な女性としての姿は、かの女からは取り去ることのできない事実であろう。しかし、本論を通して、私が見てきたものは、そうした自己の資性を知りながら、苦惱しつつ、恋に溺れてゆく式部の姿であった。そこに式部の「なげき」が生じたのである。

式部の恋が「つれづれ」を慰めるための遊戯であったことは一面、真実ではあるが、決してそれだけでないことは、帥宮敦道親王との精神的連帯を基盤とした恋愛を見てゆくことで認められた。しかしながら、式部が自然を詠む場合、我が身とひきくらべてしか自然を見られず、恋心の高揚時にしか、自然現象に心を添えられないのを見る時、かの女の情念のはげしさや強さが、人並はずれていたことも認めないわけにはゆかない。それは、かの女の挽歌を見ることによって、宗教的自覚への願いはありながらも、結局、それができない身と心の分離として明らかになったと思う。挽歌が示すはげしい悲嘆憂愁こそ、式部の真実の姿であろう。つまり、かの女の歌は「崩壊一歩寸前の危険な瞬間の感覚が三十一文字という短詩型に結晶した」ものであり、この身と心の分離、その板ばさみから生じる苦悩が、まさに、かの女の歌の中に「なげき」として、定着したのではなからうか。

おのが身のおのが心にはなぬを思はばものを思ひしりなん

(六八八)

と詠みつつ、恋を求めて彷徨する式部は、やはり、悲劇的なまでに純粋な女性であったと言えようか。

また、式部の歌が、恋においては、成就のよろこびはおよそたわれることなく、逆に去りゆくものに対して心が高まることや、自然に対しては、天候のような、自ずから移ろうものの、その状態に托して、自己の心情を詠むのが常であるのを見る時、式部が心惹かれ、共感するものは、日常的次元をはなれた、固定しない、はかないものであったのではないかと思う。そして、これは、飽くことなく幾度も恋愛に身を投ずる式部自身の生の姿勢に共通しているものであることに気付くのである。

注

注1 日本古代文芸における恋愛

注2 和泉式部歌集(岩波文庫) 解説

注3

和泉式部日記(岩波文庫)

注5

昭和32年度卒業論文

注6 和泉式部 筑摩書房

注7 和泉式部歌集(岩波文庫) 解説 清水文雄氏

注8